

# 高収益な特産品栽培を支援 リースハウス事業 J A いずみの

J A いずみの(谷口敏信代表理事組合長)はこのほど、農林水産省の「産地生産基盤パワーアップ事業」による補助金を活用し、総面積約1・4畝で耐風速50m/sの低コスト耐候性ハウスを建設した。

最新のセンサーを搭載しており、換気などによるハウス内の環境管理を自動で行うことができる施設で、管内の生産者6人

と14年間のリース契約を締結するリースハウス事業に取り組んでいる。

リースハウス事業のきっかけは近年相次ぐ異常気象。強風や大雨などによる露地野菜の品質低下を原因とする収入減少が課題となっていた。

谷口組合長は「規模拡大による効率化が難しい都市農業で農業所得を確保するには、高品質

化が重要」と考え、本事業を開始したとのこと。

露地栽培から施設栽培への転換を図り、特産品である水ナスやシユンギクの品質向上と生産の安定・拡大を図り、農業所得の向上と安定化を実現することにより、後継者の確保にも期待ができる。

また、リースハウス事業に関連して、次世代を担う新規就農者や若手就農者を育成するために、J A が運営する就農準備実習農場「チャレンジファームいずみの」とも連携している。希

望者に、作付計画から栽培・収穫・出荷の実践と農業経営を自己完結できる実習用ハウスを新設した。

岸和田市で水ナスを栽培する永本光一氏は「リースハウスを導入したことで、自然災害によるリスクが軽減されることが非常に大きい。利益が出れば規模拡大し、またハウスを建てたい」と話す。

(林佑)



導入したリースハウスで水ナスを収穫する永本氏

## 天気のおっちゃんのコラム

気象予報士、元普及指導員

森田 彰朗

### 第七回

#### 「台風10号を検証する」

迷走したのは台風か?人か?

台風10号は8月22日に発生し、9月1日に熱帯低気圧にかわるまで、九州から北海道までの広い地域に多くの被害をもたらしました。特に、不確実な進路予想、予想外の地域での大雨などで、気象関係者の方が翻弄され

てしまいました。今回はこの台風を検証します。

#### なぜ、速度が遅かったのか

台風は巨大なエネルギーを持つ渦巻きですが、自力では動けず、周りの風に流されて進みます。10号の場合は、太平洋高気圧に押される形でじりじりと西へ進んだ後、鹿児島島の南で行き場を失って「ゆっくり」しか動けなくなりました。これは、北



に張り出した太平洋高気圧、上空の寒冷渦、はるか北の偏西風が台風を動かせなかったことなどが原因とされます。

#### なぜ、急発達・急減衰したのか

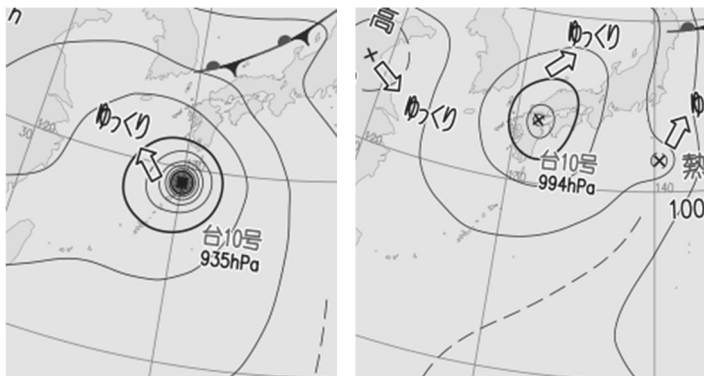
中心気圧が935ヘクトパスカルまで発達したのは、平年より高い海水温域が、九州のすぐ南まで広がっており、海水から多くの水蒸気が供給されたためです。急に弱くなった原因は、屋久島と九州の山岳の影響で、いずれも通常の台風でも起こる

現象です(図)。

#### なぜ、中心の遠くで大雨か

台風10号の特徴は、関東や東海で大雨が降り、被害が出たことです。これは「遠隔豪雨」といい、特に、梅雨期や夏の終わりに多い現象です。台風の雨は、中心から遠くても被害を及ぼすことを忘れてはなりません。

「想定外」の台風10号も、よく見るとそんなに特別なことは起こっていません。やはり、日頃の備えが一番なのです。



左が28日9時、右が30日9時の天気図  
935hPaの中心気圧が994hPaまで弱まっている